

ポツクリ（コロリ）信仰の諸相（一）

——東海地方を事例として——

松崎 憲三

はじめに

- (一) ポツクリ（コロリ）信仰研究小史
 - (二) 三重県志摩町御座の「石ボトケ」
 - (三) 名古屋市・興正寺の「大随求明王」
 - (四) 静岡市・洞慶院の「烏瑟沙摩明王」
 - (五) 静岡県駿河小山町の「足柄山聖天堂」
- 結びにかえて

民俗学には、歴史的関心に基づくアプローチの方法と現代的関心に基づくアプローチの方法との二つがある。そうして前者は、歴史的世界を認識するために現代の民俗を調査・研究対象とし、後者は現在を理解する前提として、歴史的世界の把握を不可欠なものとしている。すなわち、どちらとも過去と現在との対話を前提としており、それが民俗学の特徴といえる。⁽¹⁾この二つのアプローチの方法双方が必要なことは言うまでもないが、筆者はどちらかといえば後者に関心を抱いており、社会の変化を見据えながら、民俗文化の行方を見定めていくことの必要性を痛感している。先学もこうした視点に立つて多くの業績をあげてきた。柳田国男の『明治大正史世相篇』、『現代日本文明史一八巻・世相史』、『明治文化史一三巻・風俗』等々がその代表例といえる。⁽²⁾ちなみに世相とは、平たく言えば世のありさまのことであり、歴史学でいう時代相に相当するが、「ある時代の共時的文化の全体像」をさし、風俗がその物象といえる。⁽³⁾

昭和四〇年代以降流行を見、急速に各地に広まった風俗現象に、水子供養とポックリ（コロリ）信仰とがある。これらの流行は、日本社会が多産多死から多産少死の期間（昭和初期から昭和二五年頃まで）を経て、少産少死の社会へと短期間に急激な人口構造の変化を達成し、少子化・高齢化社会を迎えたことが背景にある。このうち水子供養については既に言及している

ことから、小稿ではポックリ（コロリ）信仰を取り上げることにした⁽⁴⁾。故宮田登は今日流行のポックリ信仰について、実際には寝たきり老人やボケ老人の下の病が祈願の対象になっている点と、半身不随のまま生き続けるよりも静かにあの世に往生したいという老人の切実な願いに端を発している点を指摘している⁽⁵⁾。ポックリ（コロリ）信仰とは「健康で長生きし、万一病気になるたとしても長患いせず、下の世話にもならず安らかに往生を遂げたい、という心境に基づく信仰」といえるが、宮田が指摘するように、下の世話でまわりに迷惑をかけたくない、という老人達の思いは相当強いようである。小稿では木村博の業績を中心に研究史を整理し、その上で東海地方のポックリ信仰について報告することにした⁽⁶⁾。

（一）ポックリ（コロリ）信仰研究小史

民俗学の分野でポックリ（コロリ）信仰を逸早く取り上げたのは木村博であり、末期の水をめぐる問題、死期を早めるために臨終の病人を抱きおこす習俗、あるいは病人が苦しんでなかなか死ねない時に寺院へ出向いて「理趣分を繰る」習俗、さらには病氣平癒の願を解消する「願戻し」等々に分析を加えた⁽⁶⁾。木村によれば『ポックリ』信仰は民俗であって、昔から誰しも願っていたことであり、何も現代人なるが故に、現代に特有な信仰というわけではない」と

（7） 木村の指摘する通りと思われるが、今日流行を見せていることも確かであり、だからこそ過去と現在との対話を基本に据える民俗学の恰好のテーマとなりうるのである。それはさておき、このテーマの研究は木村一人にゆだねてきたというのが正直なところであり、このほかには、大島建彦、飯島吉晴、武田正の論稿や報告例がある程度である。（8） なお、成城大学大学院の伊藤由佳子が『ポックリ信仰の諸相』なる修士論文で全国的な把握を試みたが、未発表のまま現在に至っている。（9）

一方仏教福祉の分野では早くから関心を集めてきた。先ず芝崎慎悟は、昭和四〇年代後半に、奈良県北葛城郡香芝町・阿日寺（浄土宗）の実態調査を実施し、さらにポックリ信仰の歴史的経緯をふまえた上で、同信仰を老人達が尊厳を保つために残された、たった一つの手段とみなした。（10） また、芝崎同様参詣者達の動機あるいは心理に焦点を当て、分析を試みたのが井上勝也である。井上は奈良県生駒郡斑鳩町・吉田寺（浄土宗）の調査をもとに、「ポックリ願望は人としての尊厳を保つたり良き生を目指した『生の願望』である」と指摘し、芝崎以上に積極的な評価を下している。（11） それに対して、菅井大果は日本の高齢化社会の実状を把握した上で、高齢者を取り巻く悲惨な状況がポックリ信仰を生み出した、との見解を示した。（12）

さらに科学史・医学史専攻の立川昭二は、『病気を癒す小さな神々』の中で、民間医療・信仰の一例としてポックリ信仰の寺社を取り上げている。紀行文風のタッチで記されているものの、

研究の一助となりうるものである。⁽¹³⁾

おおまかな研究史は以上の通りであるが、小稿が東海地方のポックリ信仰に焦点を当てていることから、木村の先行研究のうち、臨終の病人を抱き起こす習俗と、理趣分を繰る習俗についてより詳しく見ることにしたい。

先ず前者に関する木村の報告は、静岡県伊東市のある海辺のムラで、明治末から大正初期に生まれた人達から聞いた話である。この辺りでは、もういよいよ駄目だという病人に対して、いたずらに苦しみを続けさせておかず、「もういいかげんに起こしてやるべえ」と一族の長老格の人が言い出す例があったという。「臨終間近になれば、この辺の応答は言わず語らずで、後から布団の上で抱いてやったものだが、こうして一度オコシてやった病人を『ラクになったから寝かしてやるべえじゃ』と寝かせて死水をやったそうである」。目下の所こうした習俗が確認されているのは、伊東市及び熱海周辺の他、東京都の伊豆諸島であり、地域的に限られているようである。木村はこうした習俗について「いわば安楽死そのものと言って良い」と断言しているが、一方では安らかな死を迎えさせてあげたいという、遺族の心情による行為である点を強調している。⁽¹⁴⁾

木村の報告でもう一つ興味深いのは、安楽死祈願のため、寺院の住職に理趣分を繰ってもらふという習俗である。ちなみに「理趣分を繰る」とは、大般若六百巻中の理趣分を讀誦すること

とである。木村の報告では、神奈川県小田原市、静岡県駿東郡小山町、焼津市、庵原郡由比町、熱海市、加茂郡松崎町のほか、岐阜県恵那郡明智町、瀬戸内海の小島（広島県）の例が確認できたという。⁽¹⁵⁾一方松崎かおりは、滋賀県蒲生郡日野町にもこうした習俗が認められるとして、次のように報告している。⁽¹⁶⁾

日野市中之郷では、治癒の見込みのない病人が苦しみ出した時に、佐久良集落在の仲明禪寺（曹洞宗）にリッシンブのお願いに行ってお経をあげてもらおうと病人がラクになる。またこの祈願のお願いに出かけている間に、よくヒノタマを見るといふ。ヒノタマを見るといふ話から分かるように、病人がラクになるとは、病人が病の苦痛から解放されて臨終を迎えたことを意味している

と。さらに松崎は、依頼する側と住職側の「理趣分を繰る」習俗に対する認識の微妙な相違についても言及している。

ちなみに『理趣経』にはサンスクリット語の原典があるが、日本に伝わる『理趣経』はこれとは異なり、初段がサンスクリット語、後段がコータン語（中央アジアの言語、コータンは大乗仏教隆盛の地）訳のもので、現世、来世の直接的な利益を説く、賛嘆文部分の翻訳だという。

『理趣経』あるいは大般若経の中の理趣分の本意は、理趣経曼荼羅を本尊とし、この経を所持する者は、悪魔下道に邪魔されることなく、四天王によって守護されるという。また滅罪のために修法するものとされ、殊に女姪罪を滅するに効果があるとされている。ただし、『理趣経』にはもう一つ特有な主張が見られる。それは「ついに横死することなく、厄いや災難に遭うことなく、一切の仏・菩薩に守られ、もろもろの仏土で願いに応じて往生する」という箇所である。異本には、未来の来迎・往生の思想をより鮮明にしたものも多く、こうした変化が、日本の『理趣経』信仰に何らかの影響を与えたと見られている。⁽¹⁷⁾

ところで、静岡県が、この種の習俗の豊庫なのかどうかは判断しかねるが、木村が静岡県在住の研究者であり、地道なフィールドワークによって多くの資料を蓄積してきたことに敬意を表したい。静岡県を中心とする地域の、安楽死（苦しまずに安らかに往生をとげる）をめぐる習俗の多様性を知らしめてくれるからである。木村はこのほかポックリ寺の信仰についても触れているが、それに関しては筆者の調査に基づいて以下の章で報告することにした。なお、田方郡天城湯ヶ島町市山・明徳寺（曹洞宗）については、立川や飯島が報告していることからごく簡単に触れるにとどめたい。

(二)三重県志摩町御座の「石ボトケ」

「石ボトケ」は志摩町御座字西の山の海岸線に祀られており、満潮時には腰まで海水が浸ることから、「潮ボトケ」あるいは「ぬれボトケ」とも呼ばれている。この「石ボトケ」については昭和期に書かれた縁起があり、その内容は次のごとくである。⁽¹⁸⁾

御座浦石仏地藏尊縁起

抑々地藏尊の由来を案ずるに遠く釈尊の在世当其の付嘱を蒙りて来世無仏の世界に出で、よく濁悪の衆生を化導し縁に触れ機に応じて限り無き施しを給ふこと恰も太地の触穢を淨化して万物を生々育成せしむるが如し

茲に志摩国御座港俗に「いしほとけ」と称し奉る地に今を去ること八十五年前明治の初年当り当村弥吉老人の午睡の夢に「我は本地地藏菩薩なり古くより因縁に感じて此の所に姿を現す若し心の運び至心に祈願せんものには定んで腰より下の病疾を治すべし且つ我海水の浸すところに在りて諸人の為に常に代わりて苦患を洗淨せん必ず高処に移すこと勿れ」と現はれ給ふ即ち弥吉老人此の石を祀ること恰も仏に対するが如し元来自然石なるを以って其後波切の石工某是を毀ちて石垣の料にせんとせしにその妻女忽ちに病に犯され冥罰を思ひつ、逝

けりと明治三十年の頃に至り当村柴原市太郎氏長男徳平氏こゝに一基の地藏尊を建立し爾来幾星霜靈驗著にして威力靈感日夜弘大せられつつありといふ

小納昭和八年四月下旬偶々病を当地に養うて潮音寺に寓じ此靈驗を聴く恰も柴原市太郎老人の発願の下に新たに詣路の開削せられたるを知り尚村民拳つて帰依崇敬の誠心を運ぶを見て感激に堪えず小納又深く祈念するところあり宿病日を逐うて快復するに至る洵に不可思議の感応と称すべし依て潮音寺住職児玉芳山師とはかり共に供養の法会を営み御詠歌一首を獻じかねて其由来を記し後人に示すと云ふ

かぎりなき世の諸人を救はんと

御座の浦わに おはすみほとけ

大和国総本山 長谷寺化主

大司教大僧正 小林正盛謹述

大祭日 三月十五日 月祭毎十五日

志摩町潮音寺住職

児玉芳山

この縁起は、長谷寺の小林正盛大僧正が潮音寺における療養経験に基づいて記したものである。これによって「石ボトケ」が明治初期以来祀られ、当初自然石だったものが、明治三〇年頃柴原徳平氏によって石像地藏尊が建立されたこと、また腰から下が満潮時に海水に浸ることと関連して、腰から下の疾病に靈験があるとされ、其の背景に代受苦の思想があること等々が知られる。志摩町御座は町の西部、先志摩半島の西端に位置するが、隆起食台地にある半農半漁の集落である。大部分は雑木林に覆われ、水田は谷間にわずかに見られる程度である。生業は沿岸漁業が中心で海女と真珠養殖に特色があり、近年は観光客も多い。⁽¹⁹⁾「石ボトケ」は婦人病や安産にご利益があるとされ、とりわけ海女たちの信仰を仰いできた。かつては大祭日の三月一日には、土地の人々は団子二つを土器に盛り、松葉を箸としてお供えしたとい⁽²⁰⁾う。

今日では婦人病平癒や安産祈願のほか、垂れ流し（下の病）にも効験があるとされ、女性のみならず男性を含めた老人達の信仰対象となっている。一九七〇年代前半には、一日で参詣者十数人を数えたこともある。このように、婦人病、下の病、子供のおねしょ封じに効験のある神仏が、高齢化社会の到来とともに、「下の世話になりたくない」というポックリ信仰と結びついて展開をとげた例は、御座の「石ボトケ」のみならず各地に見られる。静岡県田方郡天城湯ヶ島町市山・明徳寺（曹洞宗）「烏瑟沙摩明王」や、京都市右京区嵐山薬師下町・薬師寺（臨濟宗）の「梯子地藏」などがその好例である。

(三) 名古屋市・興正寺の「大随求明王」

名古屋市昭和区八事本町にある八事山興正寺は、「尾張高野」の異名を持つ。空海を開基とし、天瑞円照を中興の祖としており、今日では真言宗高野山の別格本山と位置づけられている。貞享三年(一六八六)天瑞円照和尚が高野山より熱田の八文字屋右衛門を頼り、当地に来て草庵を結び、律寺建立を志した。貞享五年(一六八八)に尾張二代藩主徳川光友公の帰依を受け、八事山遍照院興正寺の称号を賜り、徳川家祈願所として、また真言宗密教の教学及び修行道場として諸堂が建立された。尾張藩が興正寺を保護した理由は、紀伊国高野山を模した信仰のメッカを尾張にもつくり、人々が仏の慈悲に恵まれるようにと願ったためであり、さらには、興正寺が飯田街道の要衝として軍事的に重要な機能を担いえたからである。⁽²¹⁾

天保一二年(一八四一)岡田啓、野口道直によって著わされた『尾張名所図会』巻五には次のように記されている。⁽²²⁾

八事山興正律寺遍照院 八事村にあり。眞言律宗、和泉國大鳥郡大鳥山神鳳寺派なり。元祿元年八月二十八日 國君建立し給ひて、弘法大師を開山となし、天瑞比丘を中興開山となし給へり。當山は東西二山ありて尾張高野とも稱す。女人結界なればなり。然れども西

山はこれをゆるせる故、常に女人の參詣たゆる事なし。西山より東山へ至るには、能満堂の側よりつま上りにして、左右に有縁・無縁の石塔婆數百建列ね、高野山奥の院に擬す。此内に骨堂あり。夫より左へ山を登りて女人堂あり。即東山の入口なり。是より女人の參詣を禁ず。女人堂より半町程東に、九品臺と稱して九品佛の石像あり。此北に隣りて開山塔あり。此山を善衆界といふ。惣本尊大日如来居ませる後の山を吞海峯と號く。眺望いふばかりなし。又東へ下りて開山堂あり、其東に鎮守八幡宮の社あり、此所を吐月峯と號す。月の詠尤よし。夫より東山の本道前へ出づる。委しくは圖を見て知るべし。

惣本尊 大日如来の銅像。境内山頂に安置す。長一丈二尺、座右の下五間四方あり。

東山本尊 馬頭觀音。

西山本尊 正觀音。

寺寶 釈迦如来楞嚴會上說相思恭の筆。釈迦・大日・薬師の三尊御衣水は赤称權、御野子は鐵刀木、迦羅木虚空藏菩薩

枝珊瑚珠大枝十二本、小枝廿五本。碼瑙石香盆。靈照女古法眼元信筆。楊柳觀音明の戴文進筆。羅漢畫雪舟筆。白衣觀音兆殿司の筆。

魚藍觀音即非權師の筆。五百羅漢水を渡る圖思恭の筆。鑑眞和尚竺布二十五條の袈裟泉州大鳥山より傳來。弘法大師

三鈷杵高野山眞律院の別所より傳來。大黒天河利帝母像當山中において出現。鬼谷子像顔輝の筆。

ここに記されているように、興正寺は東西二山に分かれ、総本尊は大日如来で境内山頂に安

置され、東山本尊は馬頭観音、西山本尊は正観音であった。先に触れた通り、貞享三年（一六八六）に天瑞円照和尚がこの地に草庵を結び、そして元禄元年（一六八八）には東山の地を賜わり、同二年西山の地を賜わる。同九年に藩主光友公は生母の供養のため大日如来座像の鑄造を起工し、同一〇年に落成し供養が行なわれた。寛延四年（一七五二）に第五世諦忍和尚が西山に阿弥陀堂を建立し、また文化五年（一八〇八）第七世真隆和尚の時に五重塔を建立した。両山のうち東山が整備され、次いで西山も次第に整備されていったが、東山では高野山奥の院に倣い、参道の左右に宝篋印塔きやく約三六〇余基が建立され、女人門よりは女人結果とされた。しかし阿弥陀堂（本尊）や五重塔のある西山は女性の入山が許可されていたため、女性を含めた多くの人々によって信仰されてきた⁽²³⁾。現在本堂には、慈覚大師作と伝えられる本尊阿弥陀如来のほか、大随求明王、不動明王、愛染明王、文殊菩薩、弘法大師像等が奉安されている。このうち、今日ボックリ信仰の対象となっているのはほかならぬ大随求明王のだが、『尾張名所図会』にはこの仏に関する記載は全くない。また天保一三年（一八四二）四月九日に興正寺のご開帳祭りを訪れ、その様子をつぶさに記した細野要斎の『感興漫筆』にも全く姿を表わさない⁽²⁴⁾。ちなみに、八事山興正寺で現在行なわれている年中行事は次のようなものである。

一月・五月・九月の五日：大般若祈祷会

三月三日……星祭供養会・節分析禱会

三月二一日……春彼岸彼供養会

四月一四日……開山忌

八月一六日……布薩会並びに盆施餓鬼会

九月二三日……秋彼岸供養会

一〇月第三土曜日……千燈供養会

一二月一～五日……仏名会

これらの年中行事のうち、最も盛大に行なわれているのは一月・五月・九月の大般若祈祷会と、一〇月第三土曜日の千燈供養会である。再三引用している『昭和区誌』『大正・昭和（戦前）の昭和区』の章の「八事の寺社と祭礼」なる項には、この千燈供養会と「七月参り」が取り上げられている。後者について見ると「毎月五日と一三日には『七月参り』が行なわれる。七ヵ月続けて参ると大願が成就するといわれるものであった」と、きわめて簡単に報告されているだけである。一方今日興正寺から発行されているパンフレットには「毎月五日・一三日 大随求⁽²⁵⁾ 明王、虚空蔵菩薩の御縁日、本堂に於いて信者各位の御加持及び護摩祈祷会を行ないます。又

この御縁日には大随求明王を信じて老後の息災を願う七ヶ月参りの参詣者で賑わいます」と記されている。少くとも第二次大戦前までは、大随求明王あるいは虚空蔵菩薩の縁日を中心に「七月参り」が行なわれていた。しかしその後は、五日の大随求明王の縁日を中心に「七月参り」が繰り広げられるようになり、大般若祈祷会と重なることにより盛大さを増していった、そういう経過を辿ってきたように思われる。

興正寺は「七月参り」を「七ヶ月参り」と記しているが、次のように説明している。⁽²⁶⁾

当山には古来より七ヶ月参りという参詣の風習があります。七ヶ月参りとは、毎月一回七ヶ月参詣して満願になりましたら「お血脈」を授与いたします（この七ヶ月は、必ずしも連続してというわけではなく、ご自身の都合に合わせて参詣していただければ結構です）。また毎月一回七ヶ月を七回繰り返す、つまり四十九ヶ月お参りされた方には、当山より袈裟を授与します。

この「お血脈」は仏様をお参りすることにより、仏様とあなたの間に血の脈、いわゆる縁が結ばれたということです。生前にはご自身をお守り下さる「お守り」として仏壇など不浄にならない場所に保管してください。また後生は冥土にお持ち下さい。

七ヶ月参りの本尊は大随求明王様です。經典に曰く「大随求明王無量の効力には真言を念

じ誦ずれば衆生の求むるにしたがい悉く一切の苦惱を消滅し心身堅固となり給えり」とあります。しかし特に当寺の大随求明王様は、お参りすることにより、老後下の世話にならぬようお守り下さるといわれ、また長患いせずにポツクリといけることから、本尊大随求明王様をポツクリさんと親しみを込めて呼ばれる方々もみえます。

大随求明王真言

おんばらばら　さんばらさんばら

しんじりや　びしゆだに　うんうん

ろろしゃれい　そわか

ご宝前にて、この真言をお唱え下さい。

先に引用したパンフレットには「又このご縁日は大随求明王を信じて老後の息災を願う七ヶ月参りの参詣者で賑わいます」と書かれていたにすぎない。しかし本堂内の説明書きには、「特に当寺の大随求明王様は、お参りすることにより、老後下の世話にならぬようお守り下されるといわれ、また長患いせずにポツクリといけることから云々」と記されており、その具体的効験が謳われているのである。こうした信仰は、どうやら第二次世界大戦以降目立つようになった模様である。興正寺側は特にポツクリ信仰で布教・宣伝活動をすることもなく、またマスコ

ミに取り上げられることもなかったが、口コミで徐々に広がり、今日七ヶ月参りで満願を迎える人は一ヶ月平均八〇〇人ほどいるという。特に五日の縁日に満願を迎える人が集中する傾向にあり、この日一日で四〇〇〜五〇〇人が血脈を授与される。血脈とは、興正寺側の説明では、陀羅尼を書写したものだそうである。

大随求明王をボックリ信仰の対象としているのは、管見の及ぶ限り興正寺の一例のみである。ちなみに『望月大仏教辞典』で「大随求菩薩(ダイズイグ ボサツ)の項をひくと

大随求は梵語摩訶鉢羅底薩落の訳。略して随求菩薩と稱す。現圖胎藏界陀羅觀音院中、第二行の上方第一位に属する菩薩。大随求陀羅尼の功德を表顯せるものにして、即ち衆生の求むる所に随つて其苦厄を除き悪趣を滅するが故に此の名あり。

と記されている。⁽²⁷⁾この大随求明王(菩薩)の信仰がどれほど民間に浸透し、理解されているかは判然としない部分もある。興正寺側は、「病気で寝つくくということは、悪魔に取りつかれているためであり、陀羅尼によってそれを取り除く。即ち長患いしないということに通ずる。こういった信仰が口コミで広がっていった」と認識している。要するに「衆生の求める所に随つて其苦厄を除き悪趣を滅する」という大随求陀羅尼の徳に基づく信仰にはかならない。本堂を訪

れた人々は、「大随求明王護摩祈願」と記された護摩木に、交通安全、家内安全、商売繁栄、病
 氣平癒、身体健全、諸願成就、息災延命、就職祈願、心願成就、良縁成就、学業成就、合格祈
 願、安産祈願、海運祈願、無病息災、景氣回復等々どれかしらのスタンプを選んで押し、祈願
 を込めて納める。さまざま祈願スタンプがあるものの、直接的にポックリ往生を謳ったもの
 は、寺院側の配慮からか見当たらない。息災延命や心願成就その他に、そうした祈りを託して
 納めているものと判断される。

(四) 静岡市・洞慶院の「烏瑟沙摩明王」

民間では大随求明王の方は馴染みが薄いものの、烏瑟沙摩明王は比較的よく知られている仏
 である。梵名は *ucchuśma* であり、『(28)日本国語辞典』は、次のように簡潔に説明を施している。

金剛界曼荼羅の一尊。不浄を転じて清浄とする明王。形成には異同があるが、目は赤く、
 身は黒く、四臂で、火災に包まれた憤怒の相を示す。主として安産または出産の不浄を払う
 効験を持つとされるが、密教・禅宗などでは便所の守護神とする。

烏枢沙摩とも書き、不浄潔金剛、火頭金剛、受解金剛とも称されている。その像はここに記された四臂のほか、二臂あるいは六臂の場合もあり、持物も一定していない。飯島によれば、鎌倉時代にはすでに東司、すなわち便所の守護神として祀られており、また密教では、烏瑟沙摩變成男子の法と称し、出産前に胎内の女兒が變じて男子となる秘法として貴族社会の中で盛んに信仰されていたとい⁽²⁹⁾う。

烏瑟沙摩明王の信仰は、便所の守護仏としてのみならず、安産や婦人病平癒に効験のある仏として、近畿を中心とする西日本に広く信仰されている。京都市右京区梅ヶ畑高鼻町・大龍寺（浄土宗）の烏枢沙摩信仰を調べた酒向嘉子は、修験の徒が民間への流布に与かったものと考えられている⁽³⁰⁾。東海地方では、烏瑟沙摩明王を祀る寺院として知られているのは、静岡市羽鳥・洞慶院（曹洞宗）、藤枝市原・清水寺（真言宗）、田方郡天城湯ヶ島町市山・明徳寺（真言宗）の三ヶ寺である。清水寺を除く二ヶ寺は、ポックリ信仰の寺院として知られているが、清水寺でもお札を配付しており、不浄除けとして便所に貼るほか、下の病に効験あると考えてもらい受ける人も少なからずいるという。

さて、明徳寺の烏瑟沙摩明王であるが、「五〇〇年前より祀られており、そばにおまたぎおさすりといって、高さ三尺位の男根石とくりぬき便所が作られており、男根石にさわって便所をまたぎ、祭壇の烏瑟沙摩明王を拜めば、年取っても下の世話にならぬと説明されている」とい

う。また「毎年八月二九日の大祭には各地から数万人の参詣者が訪れるが、ここでは下の世話にならぬようお札、お守りのほか、下着類も販売されている」⁽³¹⁾ようである。しかも「以前は『ふんどし』だけだったが、今では腰巻からピンク色のパンティに至る驚くほど多種多様な下着が用意されている。参拝者のほとんどがこの下着を求めていく」との報告例もある。⁽³²⁾この明徳寺ほどの派手さはないものの、洞慶院も烏瑟沙摩明王を祀るボックリ信仰の寺院としてよく知られている。

洞慶院（曹洞宗）は、静岡市羽島にあつて境内の梅園でも知られ、七月一九日、二〇日の開山忌には自家製の梅干や郷土玩具のオカンジャケが売り出され、多くの参詣者で賑わう。羽島は市街地の西部、安倍川と藁科川の合流点の北西に位置する。中・北部は山地で、茶畑・ミカン園が多い。南縁の藁科川流域は平坦地で住宅が密集するものの、一部水田が残る。羽島は服織とも書き、地名は往古渡来人の秦氏の率いる服部が移住し、養蚕・機織りに従事したことに由来するという。明治二四年（一八九一）戸数四五戸、昭和三〇年（一九五五）から静岡市の大字となり、昭和四二年（一九六七）頃から宅地化が急速に進んだ。⁽³³⁾洞慶院はその羽島の中心から、藁科川の支流久住谷川沿いをおよそ北西に二キロほど遡った地点にある。洞慶院の由緒は以下の通りである。

宝徳二年(一四五〇) 恕仲天閻禪師の法嗣、石叟円柱和尚が此地に來り、建穂山麓の喜慶庵に泊った。白狐の靈告により久住山中に法場を開くことになった。守護福島伊賀守は、深く石叟に帰依して土地を寄進、この地の石上党の協力と、石叟の法弟、大巖宗梅も実務をつかさどり享徳元年(一四五二) 一字を建立し、伊賀守の法名により洞慶院と称した。石叟は師恕仲を開山と仰ぎ、自らは二世に居り、大巖を三世とした。大巖は、大いに宗風を挙揚し、賢窓・行之・回夫の三高足を打出した。この三哲は輪住制を以て当山に住し、以後末派寺院が一年交替で輪番住職を勤めた云々。

明治に入つて輪番制から独住制に改められ、今日に至っているが、本尊・千手觀世音菩薩を祀る本堂のほか、境内には烏瑟沙摩明王堂、塩溪堂、根切地藏堂等々が立ち並んでいる(境内案内図参照)。七月一九日、二〇日の開山忌の参詣者は必ずウスサマサン(烏瑟沙摩明王堂)にもお参りするといわれ、お札をいただいて東司にお祀りする。あるいは病気にかからぬよう、また老衰しても他人さまに下の世話にならぬように祈願する人も多い。一方根切地藏堂は、東京都豊島区巣鴨のとげぬき地藏の分霊を昭和初期頃に祀つたものである。当寺と巣鴨とげぬき地藏(高岩寺)は遠縁に当たり、当寺の和尚が東京遊学中にとげぬき地藏の靈驗あらたかなるを知るに及んで頼み込み、分霊をいただいたという。以来諸悪諸病を根絶やしにするといった意

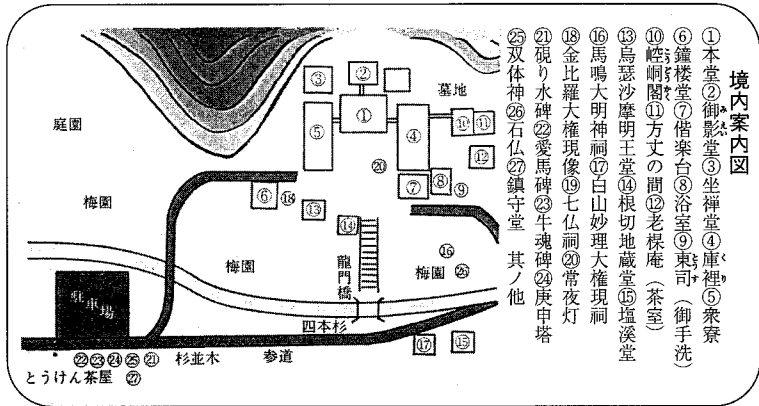


図1 洞慶院境内図

味から根切地蔵と命名し、多くの人々の参詣を仰いでいる。最後の塩溪堂は、境内を流れる溪流東の山裾塩の谷と呼ばれる地点にある。二代石叟が杖を立てるとそこから塩水が湧き出たという伝承に由来し、傍に祠を造り愛染明王をお祀りした。俗にこれを塩がまさまと言う。赤色の身体で悪魔調伏、清浄離塵を本願とすることから婦人達が月経、産穢の清浄祈願に参詣した。ことに駿河湾沿いの漁家の婦人達が多かったと伝える。彼女達に祠の前の腰掛に並んですわってもらい、柄の長さおよそ一、五メートル、底に錐を揉み穴をあけた一升柄ほどの柄杓に塩の水を汲み、呪文を唱えながら婦人達の頭に注いで加持をしたとのことである。言うまでもなく、今ではこうした光景は見られない。今日の洞慶院の年中行事は以下の通りである。

- 正月：初詣 厄除等祈願
二月旧正月：根切地藏尊、西国三十三観音大祭
二月十五日：釈尊涅槃会
四月八日：釈尊降誕祭
七月一九、二〇日：恒例開山忌
七月二〇日午後：大施食会
八月第一五日：盂蘭盆会
一二月三一日：除夜の鐘

このうち開山忌の内容について見ることにしたい。

開山忌は七月一九日、二〇日と両日にわたって行なわれる。開山堂から御開山様を本堂に移して報恩感謝と、檀信徒の無病息災（特に夏病みしないように）、家内安全、交通安全の御祈祷が執行される。明治期、大正期、そして昭和も四〇年代までは参詣者で賑わい、「開山忌の賽銭で、お寺が一年維持できた」ほどである。安倍川の安斎橋まで行列ができることもあり、「西は可睡斎（袋井市、火防の神）、東は洞慶院」と称されたという。昭和五〇年代に入っても、静岡鉄道が臨時バスを出すほどで、現在でも三、〇〇〇人〜五、〇〇〇人の信者が訪れる。その信仰

圏は、西は浜松、東は沼津辺りまである。

先にも触れたように、参詣者は本堂の御開山様をお参りした後、必ずといって良いほど鳥瑟沙摩明王殿に立ち寄った。鳥瑟沙摩明王は木像で江戸中期の作。西方の某寺が廢寺になってこの寺に祀るようになったと伝えるが、その時期は不明である。また建物は平成八年に改築されたが、以前は木造平屋の建物で、東司（和式トイレ）が三つあり、参詣者達はお札をいただいた東司をまたいでから帰った。一九日の場合は、偕楽殿に参籠し、俗謡歌舞に興ずる人も多かったという。ちなみに、ウスサマサンのお札は年間一、〇〇〇枚ほど出るそうであり、それに対して、根切地藏尊の方は、約半分の五〇〇枚程度とのことである。

本題とはやや話がそれるが、開山忌とかかわって興味深いのは、この両日販売されるオカンジャケである。オカンジャケとは、開山忌とかかわって興味深いのは、この両日販売されるオカン『俗語彙』は、静岡県内でもオカンジャケのほか、オシャシャケ、オタタケ、オカンサゲなど色々の児童語があるが、オカンジャケは御髪下げ、即ち上葛の意であろうとしている。オカンジャケとは真竹の若竹を二節の長さに切り、一節をカナヅチや石で叩きつぶし竹の纖維だけを糸状にしたもので、糸状になったものを米のとぎ汁で一晩さらして乾燥させ、赤・黄・緑・紫等の色で三色に染められている。女の子はこれを櫛ですき島田まげや桃割れ等の髪型に結び、一種の姉さん遊びをし、男の子は陣取合戦の采配や相撲の軍配にしたという。

このオカンジャケと洞慶院の結びつきは明らかではないが、新竹を利用して作られるので、作る期間は七月一〇日前後から二〇日頃に限られ、たまたま洞慶院開山忌と日程的に一致し、各地からこの玩具が縁日に持ち込まれた。そうして「おとうけんさん（洞慶院）の縁日でオカンジャケを買えば夏病氣しない」と一種の魔除け、あるいは招福の縁起物となったのではないかと、というのが寺院側の理解である。いずれにしても今日では、羽鳥に古くから住みついている六軒の家の年寄りがオカンジャケ作成にかかわっており、その製作量は毎年ほぼ一、五〇〇本に上っている。

（五）静岡県駿河小山町の「足柄聖天堂」

聖天堂は、小山町竹之下の東端足柄峠の関所跡近くにある。竹之下は古くは足柄街道の宿駅として栄えたが、曹洞宗の寺院が三ヶ寺存在する。足柄聖天堂は、そのうちのひとつ宝鏡寺の境外仏とされている。明治二三年（一八八〇）の足柄聖天堂明細帳には、以下の様に記されている。³⁵

静岡県管下駿河国駿東郡竹之下村字足柄峠

足柄山聖天堂

一本尊 大聖歡喜尊天 石像長五尺八寸余

一由緒 創立不詳、再興北条氏政公城中弓箭鎮護之為安置、

其後延宝八庚申稻葉美濃守正則、大久

保加賀守忠朝兩君及江戸南新堀白井五

郎八再々興之、爾來聯統仕候也

一本尊 (室)
間口三間
奥行五間

一境内坪数 五拾坪 官有地第四種

一信徒人員 五百五十八名

一境外所有地 之無

一聖天(講)構中ノ内日供(講)日掛ヲ以テ榮統(奉)維持法仕候也

一受持僧侶 右竹之下村曹洞宗宝鏡寺住職幹眉年

一管轄庁迄距離里数 廿四 余

前書之通相違無御座候也

駿河国駿東郡竹之下宝鏡寺住職

明治十三年 幹 眉年印

信徒総代 高橋兼吉印

静岡県令大迫貞清殿

同 藤曲善六印

戸長 岩田源蔵印

ここには、受持僧侶・宝鏡寺住職とあるが、宝鏡寺所蔵文書、万延元庚申年の「聖天宮厨子再
管勧進書」には、「鎮護主・宝鏡寺」と並んで、「宮守 高橋八郎兵衛」の署名が見える。⁽³⁶⁾ 高橋
家は足柄峠の聖天堂の隣にあり、同家はかつて「茶屋本陣」を営んでいたという。この施設が、
小田原藩の制度の中でどのような位置を占めていたのかは不明である。いずれにしても、足柄
峠は相模と駿河を結ぶ交通の要衝であり、かつては「黒砂糖一六貫が三日でなくなる」ほどの
賑わいを見せた。しかし、明治三〇年代に入ると東海道線（現御殿場線）が開通し、峠を越え
る人の数は激減した。そうした状況の中で、家経営の再建をはかるべく、二代前の当主が行な
ったのが聖天信仰の普及活動であった。⁽³⁷⁾ 彼は、明治三七年（一九〇四）に神奈川県で柳川栄誉
という修験者について山伏の修行をし、その後家に戻って聖天堂の功德を説いて近在の村々を
歩き巡った。次の当主（高橋由三師）も横浜で僧の修行をし、そのあとを継いだ。こうして小
山町、御殿場を中心に東は神奈川県秦野、平塚方面、北は山梨県の吉田、明見方面（現富士吉
田市）、西は静岡県の沼津方面一帯に聖天様の信仰が広まった。⁽³⁸⁾ 今日聖天堂が掲げる利益は、



写真1 足柄山聖天堂

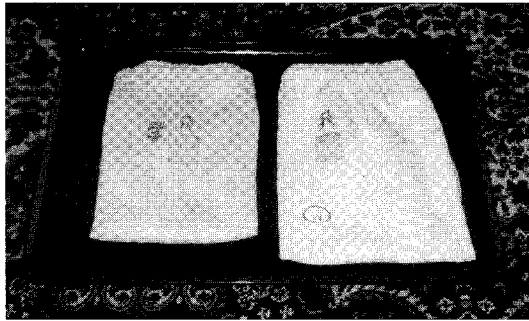


写真2 梵字及び朱印を押したサルマタ(左)とズロース(右)

心願成就・社内安全・家内安全・事業繁栄・商売繁昌・入学祈願・身体健全・愛児息災・無事
息災・家内円満・災難消除・病氣平癒・火難盜難除・安全祈願・大漁満足・旅行安全・金錢富
貴・厄除・縁結び・開運と多岐にわたる。ボックリ(コロリ)信仰との関係では、「下」の安
穩由来」なる刷物があつて、その内容は以下の通りである。⁽³⁹⁾

昔相模国、小田原在の姥、足柄山聖天堂尊に祈願し曰く

「吾、年老いて余命いくばくもありと覚え、大往生遂げたと願ふても叶わざる事往々にし
てあり、永年病床に臥し家人に『下』の面倒を受くるは堪え得ざるものあり、されば日頃信
仰せし聖天尊の功德を何卒吾に垂れ給え」と姥は持参せし「腰の物」を差し出したり、堂主、
信心深き姥に応え心を込めて誦経し、差し出せし「腰の物」に印授を書きしるし、終生之を
まとわば汝の願望必ず叶ふべし、と与えたり、
幾星霜年経て、姥の若者山を尋ねて曰く

「吾が母、米寿の祝を経て大往生せり、遺言に『下』の世話にならぬはこれ大聖歡喜双身天の
法徳なり、願わくば功德を後世に垂れ給え……これ母の意思なりと」
かくて堂主、この妙果と功德を永く伝ふべく念力こめし護法の品を、里人の善男善女に分ち
与ふる事となりぬ。

かつては毎月二〇日が縁日で、「下」の安穩その他の祈願のため、行楽がてらに参詣する人が多かった。今日では土曜、日曜にちらほら訪れる形に変わったが、四月二〇日の縁日には小山、御殿場や神奈川県内にある講の人達ほか多数が訪れる。この日朝から竹之下の世話人達一二人ほどが手伝いに来る。世話人は輪番制で大聖歓喜尊天の縁日ならではの、各戸夫婦が勤めることになっている。このうち男性はお堂に詰め、女性はまかない料理などの調理に従事する。なお、この日は宝鏡寺住職と高橋家現当主（家再興後三代目）の二人によって護摩祈祷が修せられる。ちなみに、木村が昭和四〇年代後半から五〇年代初頭に、二代目高橋由三師（明治四三年生）からの聞き書きとして次のように報告している。聖天尊の「妙果と功德を永く伝ふべく念力をこめし護法の品」は越中禪と腰巻きにほかならなかった。それも、大正の末頃までは出していたのを数年前に復活したとの事である。⁽⁴⁰⁾しかしそれもその後は、所謂サルマタとズロースに改められて今日に至っている。聖天堂によれば、五ヶ月に一度の割で六〇着ほど仕入れているとのこと、七、八割が女性用であり、参詣者も女性が圧倒的に多いが、「お父さんの分も」と称して買う人もおり、男性用も結構売れるそうである。

さて最後に、宝鏡寺と宮守としての高橋家の関係であるが、竹之下の区有文書に昭和一六年（一九四一）の「契約の証」があり、聖天堂が宝鏡寺の所有仏堂であることが記されているほか、「足柄聖天堂ノ札ハ宝鏡寺ニ於テ作成シ足柄山聖天堂ニ於テ作成セザルコト」、「札ノ頒布ハ足柄

山聖天堂ニ於テ行ヒ宝鏡寺境内ニ於テ頒布セザルコト」等々の文もあるという。⁽⁴⁾ 現在もこの「契約の証」に従がっているが、二代目高橋由三師は宝鏡の執事長を勤められ、三代目は目下宝鏡寺で修行中とのことであり、両者が協力して聖天堂の運営につとめているようである。また、宝鏡寺境内の参詣者用東司に「烏枢沙摩明王尊」の看板を掲げており、さらにはその説明板があつてその功德を一しきり説明した後で、「無心に手をあわせば、他人に、下の世話を受けないですむとも言われております」と結んでいる。明徳寺や洞慶院に象徴されているような、烏瑟沙摩信仰展開の帰結と言つてしまえばそれまでだが、足柄山聖天堂の信仰と影響関係を持ちながら今日に至つたものと考えられる。

結びにかえて

全国的に見ると、ポックリ（コロリ）信仰の対象となつている神仏は、地藏・観音・阿弥陀・那須与一公墳墓等々である。地藏の場合は各地に広く認められるものの、観音はどちらかと言えば東日本に多く、阿弥陀や那須与一公墳墓の場合は、近畿地方を中心とする西日本に偏在する。小稿で取り上げた東海地方の場合は、ぬれ仏（地藏）、大随求明王、烏瑟沙摩明王、聖天とバリエーションに富んでいるものの、烏瑟沙摩明王に対する信仰が強い、というのが一つ

の特徴と言える。また、大随求明王、聖天に対する信仰は、目下の所他地域では確認されていない。

これらどの神仏を対象にするにせよ、他人様の「下の世話」にならにようにというのが祈願の中心に据えられており、寺院側もその功德を強調し、下着の類まで頒布している所がある。聖天も含め、ぬれ仏、烏瑟沙摩明王に関しては、「下の病」「下半身」との関係で、ポックリ（コロリ）信仰へと展開を遂げたもので、その経緯もおよそ推測がつく。しかし、大随求明王の場合はその点で不明の部分が多く、残された今後の課題といえよう。

一方、参詣者は圧倒的に女性が多く、どの寺院でも七・八割は女性だという。平均寿命から言っても、女性が夫の死を見取るのが一般的であり、夫の死後自分の身を考え合わせた時に不安感がつづり、所謂ポックリ寺へ参詣するケースが多いようである。自分と同じ経験を身近な者にさせたくないという気持もあろうが、それ以上に生理現象で自分以外の人の手を煩わすことに対する忌避感情があるように見受けられる。物を食べ、消化・吸収し排泄するという基本的な行為を自分の意志で律せられないという人間としての尊厳とかかわるのだろう。それのみにとどまらず「娘ならまだしも、嫁の世話には……」と考える人も多く、その辺にもポックリ（コロリ）信仰の複雑さがある。この点については他地域の実状を踏まえながら、考察を加えるつもりである。

なお、民俗と風俗との関係で、最後に足柄山聖天堂の展開について触れ、結びとしたい。聖天尊信仰の発生契機と時期についてははっきりしないものの、初代の布教活動により、明治後期から大正末期まではかなり盛んに信仰され、越中禪や腰巻まで頒布されるようになった。その後一時衰退したものの、二代目になって再び復活し、さらに時代状況に対応する形でサルマタとズロースに改められた。こうした動きを見てもわかるように、民俗として継承されつつある時期流行化し再び沈静化する、その繰り返しの歴史であった。現在は「静かなブーム」といった所であるが、「おじいちゃんに連れられてきた事があり、自分も年相応になったので」と言つて参詣する人も少なくないという。また、親が信仰していたお陰でポックリ往生したと言つてお礼参りに来て、その後こうした子供達も信者になる例も多い。各地のポックリ（コロリ）信仰の現状を見ても同様で、風俗現象として広がりを見せる一方で、民俗として着実に伝承されていると言える。

〔付記〕小稿は、成城大学特別研究「宗教儀礼の文化史的研究」（研究代表者・小島孝夫助教、二〇〇一～二〇〇二年度）による研究成果であることをお断わりしておく。

註

- (1) 福田アジオ・古家信平「民俗学の現在と未来」『本郷』六号 吉川弘文館 二〇〇〇年 二〇四頁。
- (2) 柳田国男「明治大正史・世相篇」『定本柳田國男集二四卷』筑摩書房 一九三二年、柳田國男・大藤時彦「現代日本文明史一八卷・世相史」東洋経済新報社 一九四九年。柳田国男「明治文化史一三卷・風俗」一九四九年（一九七九年 原書房復刻）。
- (3) 井上忠司「風俗の文化心理」社会思想社 一九九五年 八〇三頁。民俗とは、一定の時間幅をもって伝承されてきた言語・行為・観念・事物をさすが、柳田によれば近世までの風俗の用語は民俗と同義だったという。しかし近世末以降流行や趣味などに偏って、近代は主として衣（みなり）の移りかわりに終始してしまつたと指摘している（『明治文化史一三卷・風俗』）。ここではその示す範囲を同義としながらも、風俗は伝播に、民俗は伝承にウェイトを置いた用語として一応区別しておきたい。
- (4) 松崎憲三「墮胎（中絶）・間引きに見る生命観と倫理観」『日本常民文化紀要』第二一輯 成城大学大学院文学研究科 二〇〇一年三月 一九〇―一九七頁。
- (5) 宮田登「心なおしはなぜ流行る」小学館 一九九三年 六五―六七頁。
- (6) 木村博「末期の水」『日本民俗学』六六号 一九六九年 一五―二四頁。同「大般若理趣分の功德」『民俗』七九号 一九七一年 三―四頁。同「安樂死をめぐる民俗」『日本民俗学』七五号 一九七一年 六四―六七頁。同「生」と「死」のはざま」『静岡県史別編1・民俗文化史』一九九五年 六七―六九〇頁。
- (7) 木村博「現代人と『ポックリ』信仰」『仏教民俗学大系七・仏教民俗の諸問題』名著出版 一九九三年 二〇一頁。

- (8) 大島建彦「四天王寺と祈願（一）」『西郊民俗』二七号 一九八五年 六〇～二二頁。飯島吉晴「烏樞沙摩明王と廁神」『仏教民俗学大系八・俗信と仏教』名著出版 一九九二年 三二一～三二八頁。武田正「ころり薬師」『おんなのフォクロア』岩田書院 一九九九年 二二二～二二七頁。
- (9) 伊藤由佳子「ポックリ信仰の諸相」成城大学大学院、一九九六年度提出修士論文。未発表。
- (10) 芝崎慎悟「ポックリ信仰の実態」奈良・当麻・阿日寺の事例を通して」『仏教福祉』創刊号 仏教大学社会事業研究所 一九七四年 三九～四八頁。同「社会不安とポックリ信仰（上）」『仏教福祉』二号 一九七五年 九二～一〇四頁。
- (11) 井上勝也「ポックリ信仰の背景」『ジュリスト 増刊総合特集一二・高齢化社会と老人問題』有斐閣 一九七八年 二〇〇～二〇四頁。
- (12) 菅井大果「老人福祉と佛教について」『仏教福祉』一一号 仏教大学仏教社会事業研究所 一九八五年 二九～一三二頁。
- (13) 立川昭二「病気を癒す小さな神々」平凡社 一九九三年 一～三三三頁。
- (14) 木村博「『生』と『死』のはざま」前掲論文 六八二～六八六頁及び六九〇頁。
- (15) 木村博「『生』と『死』のはざま」前掲論文 六八六～六八八頁及び木村博「重病平癒祈願と安楽死の願い」『静岡県史資料編24・民俗』静岡県 一九九三年 二二〇～二二二頁。
- (16) 松崎かおり「安らかな死を願う民俗」一九九七年五月一七日付、東京成徳大学における講義のレジユメによる。
- (17) 渡辺章悟「大般若と理趣分のすべて」溪水社 一九九五年 五三七～五四五頁。
- (18) 鳥羽市在住の民俗学者・野村史隆氏提供資料による。
- (19) 竹内理三「角川日本地名大辞典24・三重県」角川書店 一九九一年 一四二二頁。

- (20) 前掲野村史隆氏の昭和五二年頃の調査による。
- (21) 水野時二監修『昭和区誌』名古屋市昭和区役所 一九八七年 二七四頁。
- (22) 『尾張名所図会上巻』愛知県郷土資料刊行会 一九七〇年 四八頁。
- (23) 水野時二監修『昭和区誌』前掲書 一三二頁。
- (24) 細野要斎「八事紀行」『感興漫筆(上)』(名古屋叢書第一九卷・隨筆編(二))名古屋市教育委員会 三四～三五頁。
- (25) 水野時二監修『昭和区誌』前掲書 二七五頁。
- (26) 本堂内の説明書きより転写。
- (27) 塚本善隆『望月仏教大辞典』第四卷 世界聖典刊行協会 一九三六年 三二九二頁。
- (28) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』二卷 小学館 一九七三年 五八六頁。
- (29) 飯島吉晴「烏枢沙摩明王と廁神」前掲論文 三一六～三二一頁。
- (30) 酒向嘉子「烏枢沙摩明王信仰に関する一考察」便所神とウスシマサンの關係を中心に』『御影史学論集』一五号 一九〇〇年 四九～五九頁。
- (31) 飯島吉晴「烏枢沙摩明王と廁神」前掲論文 三二五～三二七頁。
- (32) 立川昭二「病氣を癒す小さな神々」前掲書 一五三～一五六頁。
- (33) 竹内理三編『角川日本地名大辞典22・静岡県』角川書店 一九八二年 七六八～七六九頁及び二〇四七頁。
- (34) 日本民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』一卷 平凡社 一九五五年 二二三頁。
- (35) 小山町史編さん専門委員会「小山町史第三卷・近世資料編Ⅱ」小山町 一九九四年 三〇七～三〇八頁。

- (36) 小山町史編さん専門委員会『小山町史第三卷・近世資料編Ⅱ』前掲書 三〇六～三〇七頁。
- (37) 小山町史編さん専門委員会『小山町史第九卷・民俗編』小山町 一九九三年 四二一～四二二頁。
- (38) 小山町史編さん専門委員会『小山町史第九卷・民俗編』前掲書 五六三～五六五頁。
- (39) この由緒書がいつ頃作成されたものかは不明であるが、祈祷し、朱印を押した下着を祈願者に頒布する際に渡しているものである。
- (40) 木村博『死く仏教と民俗』名著出版 一九八九年 六〇～六三頁。
- (41) 小山町史編さん専門委員会『小山町史第九卷・民俗編』前掲書 五六四頁。
- (42) 松崎憲三『「ホクリ」大権現をめぐる』高松市鬼無・千葉県大原町』『西郊民俗』一八二号
二〇〇三年 一一～一六頁